

# 富山市北代西山遺跡発掘調査報告書

2000

富 山 市

富山市教育委員会

## 序

富山市は、富山県のほぼ中央にあって、北は日本海に面し、東は立山連峰を望み、西には緑豊かな呂羽山丘陵を仰ぐ風光明媚な土地であります。恵まれた大自然の中、多くの先人たちが育んできた貴重な文化財は、富山の歩んできた歴史を知るためのかけがえのない財産であります。これを保護し、未来へ継承していくことは、私たちが果たさなければならない責務といえます。

現在、富山市には約600か所の遺跡が確認されています。なかでも呂羽山丘陵西麓は、起伏に富んだ地形を利用して200か所にも及ぶ遺跡が集中しており、まさに遺跡の宝庫となっております。

北代西山遺跡は、この呂羽山丘陵西麓の一角に位置する遺跡であります。周辺には縄文時代中期の國史跡北代遺跡を復元整備した「富山市北代縄文広場」があり、多くの市民の皆さんが訪れる歴史学習の場、憩いの場として親しまれています。

このたび本市が施工する都市緑化植物園建設に伴い北代西山遺跡の発掘調査を行ったところ、縄文時代に営まれた遺跡であることが明らかになりました。このことは、呂羽山丘陵における縄文時代の遺跡の移り変わりを明らかにする上で貴重な発見といえます。

このような調査成果をまとめた本書が、私たち共有の財産である埋蔵文化財を理解していただく上で参考になれば幸いです。

最後に、調査にあたりご理解ご協力をいただきました池元呂羽地区、長岡地区の皆様はじめ、富山県教育委員会文化課、富山県埋蔵文化財センター、株式会社中部日本鉱業研究所、各関係機関の方々に厚く御礼申し上げます。

平成12年3月

富山市教育委員会

教育長 大島哲夫

## 例　　言

- 1 本書は、富山市北代地内に所在する北代西山遺跡発掘調査報告書である。
- 2 調査は、都市緑化植物園事業に伴う本調査である。
- 3 調査は、富山市教育委員会 埼蔵文化財センターの指導・監理の下で㈱中部日本鉱業研究所が実施した。
- 4 調査期間は、平成11年11月18日から平成12年3月9日まで現地発掘調査及び出土品整理、報告書の作成を行った。
- 5 調査は㈱中部日本鉱業研究所 埼蔵文化財調査室、井伊浩一郎が担当した。
- 6 本書は富山市教育委員会 埼蔵文化財センターの監修のもと㈱中部日本鉱業研究所が編集した。
- 7 調査にあたり、富山県教育委員会文化課、富山県埼蔵文化財センター、利波匡裕の各氏から指導を得た。また、地元共済地区、長岡地区にご協力を得た。記して謝意を表します。
- 8 調査参加者は次のとおりである。  
井原憲吉、齊藤利子、野上信子、堀ヨシ子、長島むづ子、坂井英美子、武脇昭子、山藤節子  
(以上、下村シルバー人材センター)。  
菊地　正、宝田　清、岩脇　弘、本江富雄、小川真一、堀　敏夫、高浜久美。
- 9 遺物の整理にあたっては、㈱中部日本鉱業研究所の以下の者が参加した。  
岩瀬三幸、大庭麻起子、渡辺賀世子、神保彩子。
- 10 出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会 埼蔵文化財センターが保管している。
- 11 本書の執筆は、井伊が行った。但し、Ⅱの「1. 調査に至る経緯」については富山市教育委員会 埼蔵文化財センター主任学芸員の古川知明が行った。

## 凡　　例

- 1 遺構の表記については、溝はSD・土坑はSKとし、その後に通し番号を付した。
- 2 本文中のグリッドは東西方向にアルファベット、南北方向に数字で表す。杭の数字はグリッド名である。
- 3 本文中、[■■■]は地山を示す。

## 目　　次

I 遺跡の概要	1	IVまとめ	13
1. 北代西山遺跡の位置と環境	1	図版	15
2. 古地図から見る北代西山遺跡周辺の地形	2	写真図版	18
II 調査の概要	3	報告書抄録	24
1. 調査に至る経緯	3		
2. 調査の経過	3		
III 発掘調査の結果	7		
1. 層序	7		
2. 遺構	7		
3. 遺物	11		
(1) 純文土器	11	第1図 北代西山遺跡と周辺の遺跡	1
(2) 円盤状土製品	11	第2図 射水平野の古地理変遷	2
(3) 上器底部	11	第3図 測量迅速図「呉羽村」	2
(4) 石器	12	第4図 調査区域図	4
(5) 須恵器	12	第5図 全体遺構図	5
		第6図 基本土層図	7
		第7図 SD01,SD02実測図・土層図	7
		第8図 SK06,SK12実測図・土層図	8
		第9図 SK14,SK18実測図・土層図	9
		第10図 第1トレンチ土層図	10

# I 遺跡の概要

## 1. 北代西山遺跡の位置と環境

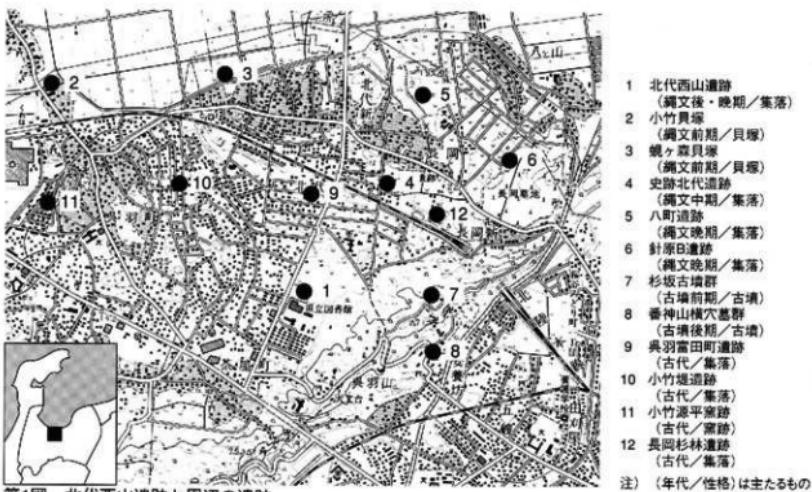
北代西山遺跡は、富山平野のはば中央を南西～北東に走る呉羽山丘陵の西麓に位置する。丘陵は富山市八ヶ山から婦中町友坂までの全長約81km、最大幅約2kmに及ぶ。丘陵の東側は神通川とその支流井田川に近接し、急斜面を成する。西側は緩斜面のため昔から良好な耕作地として活用されてきた。

遺跡は丘陵の西側、緩斜面及び丘陵から続く小支谷の先端部に所在し、遺跡の北側にある谷底では湧水がみられる。遺跡所在地は明治時代の地図から當時耕作地として利用されていたことが判る。

呉羽山丘陵には、旧石器時代から歴史時代に至るまで数多くの遺跡が存在し、富山県内遺跡の密集地帯の一つに数えられる。縄文時代前期には、蜆ヶ森貝塚、小竹貝塚などの淡水産貝塚が古放生津潟の周縁に発達する。中期には、北代遺跡に代表される集落遺跡が台地上に多く出現する。北代遺跡は旧石器時代から平安時代までと長期にわたる複合遺跡である。中期中葉から末までに約70棟以上の住居が確認されている。晩期は台地からやや離れたところで八町遺跡、針原B遺跡が形成され、当時の好資料をみることができる。

弥生時代末から古墳時代には、初期古墳の杉板古墳群をはじめ、県域最東端の横穴墓群である番神山横穴墓群や呉羽山古墳が丘陵の東側に築かれる。また丘陵の南西端には、四隅突出型方墳を有する杉谷古墳群があり、出雲地方との地域交流が窺われている。

古代においては、仏教的色彩の強い遺物が出土した長岡杉林遺跡、9世紀初頭の住居跡を擁する呉羽富田町遺跡等の集落遺跡の他、双耳瓶や長頸瓶が焼成される小竹源平窯跡がある。



第1図 北代西山遺跡と周辺の遺跡

## 2. 古地理図から見る北代西山遺跡周辺の地形

第2図の①は縄文時代前期の古地理図である。この時期は海面が急激に上昇する縄文海進期にあたり、古放生津は呉羽山丘陵の近くまで入り込み潟湖を形成していた。前期の遺跡は湖の周辺及び丘陵の内陸部に見られる。

②は縄文後期から弥生時代にかけての古地理図である。縄文海進のピークを過ぎ、海面は少し低下、潟湖の埋積が進行するようになる。遺跡の配置から放生津潟の形成に伴って、生活の場は移動していることが判る。また、呉羽山丘陵寄りの潟湖の一部は、まだ埋積せず残っていた。

第3図は明治43年当時の呉羽村周囲の地図である。縄文前期の丸ヶ森貝塚や小竹貝塚の位置は水田に、北代西山遺跡の位置は耕作地として利用されている。遺跡の北西には水田に利用されている部分があり、丘陵の内側に延びた凹地と近接していることが判る。

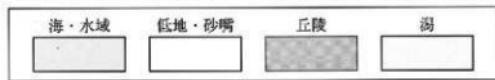
①縄文前期(6,000年前、シジミ-タニシの時代)



②縄文後期～弥生時代(3,000～2,000年前)



第2図 射水平野の古地理変遷 「アーバンクボタ No.31」 P.42より



第3図 測量迅速図「呉羽村」明治43年陸地測量部 1:20000

## II 調査の概要

### 1. 調査に至る経緯

北代西山遺跡は、昭和63年から平成3年に行われた市内分布調査で新たに発見された遺跡である。遺跡は平成5年3月発行『富山市遺跡地図（改訂版）』に登載され、周知の埋蔵文化財包藏地として知られることになった。

平成3年、富山市都市開発部公園緑地課から都市緑化植物計画が提示され、埋蔵文化財の取扱いについての検討が始まった。計画地内には先の分布調査で確認された3遺跡が所在し、同年11月それらについて試掘確認調査を必要とするとの回答を行った。これを受けて平成4年8月、公園緑地課は市生涯学習課、地元地区代表との三者協議を行い、試掘確認調査の実施について合意を得た。

調査は、平成4年10月公園緑地課の依頼を受け、同年11月17日から平成5年3月まで茶屋町遺跡20,000m<sup>2</sup>、北代西山遺跡2,000m<sup>2</sup>を対象に試掘調査を行った。調査の結果、茶屋町遺跡では旧石器時代の包含地、縄文時代後期の堅穴住居跡、炉跡、平安時代の製鉄炉、廐溝場2か所が検出され、約8,800m<sup>2</sup>の集落・生産跡であることが明らかとなった。

北代西山遺跡では、縄文時代後期とみられる小穴、環を充填した土坑が検出され、約2,000m<sup>2</sup>の縄文時代集落であることが明らかになった。遺跡範囲はさらに東側へ拡がることも確認され、今後試掘確認調査が必要となる。

平成11年7月、北代西山遺跡において造営等工事が計画され、11年度下半期において発掘調査の実施が公園緑地課から要望された。発掘調査範囲は、当初ほぼ全面積に近いものであったが、緑地等で残すなどの計画変更を行い、約1,230m<sup>2</sup>の発掘調査面積を確定した。

調査の実施にあたっては、市教委において十分な調査体制がとれなかつたため、民間委託を活用して行うこととし、市教委の監理のもと株式会社 中部日本鉱業研究所（代表取締役 津嶋春秋）が発掘調査を担当することになった。

調査は、平成11年11月18日に着手し、12年2月3日に完了した。

### 2. 調査の経過

11月18日より発掘調査に着手する。11月21日までバックホーにより表土（現代耕作土）を掘削する。その結果、調査地区は南側から北側及び西側に傾斜することを確認する。

11月24日より2日間、（㈱中部日本鉱業研究所地盤調査部によって任意座標によるグリッド設定を行い、5m間隔で杭を打つ。

調査は、グリッドごとに遺構面の検出・確認、遺構掘削の作業を繰り返していくことにする。

まず南端から西側に向かって確認作業を行い、続いて中央部西側に移った後、12月8日より検出した各遺構の半裁作業を行う。

12月13日より中央部東側及び中央部の確認作業を行う。しかし、雨天や降雪のために遺構の半裁作業は12月下旬にずれ込む。12月27日をもって平成11年の調査を終了する。

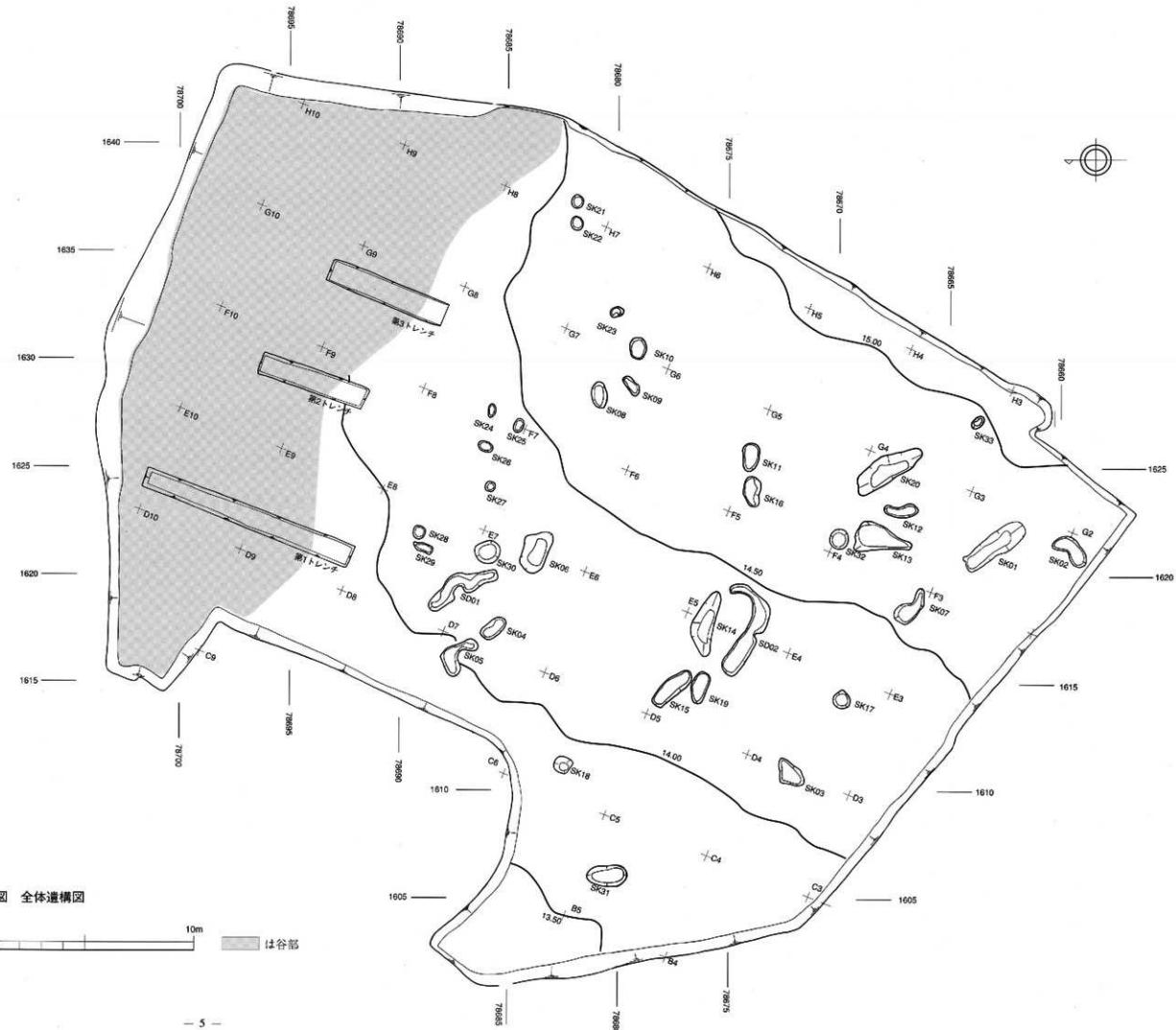
明け1月5日より平成12年の調査を開始。昨年末に統いて半裁作業及びSK18（集石土坑）の精立を始める。1月11日、SD02から石冠を転用した円石を検出する。

1月12日より北側の確認作業を行い、3本のトレンチを設定する。断面観察を試みた結果、地山土の落ち込み及び谷部の広がりを確認する。

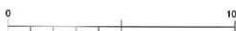
1月17日より、遺構の完掘を開始するが、雨天のため作業は1月下旬までずれ込む。1月29日、航空測量を行い、2月3日に現場調査を完了する。



#### 第4図 調査区域図 1:2500



第5図 全体構造図



は谷部

### III 発掘調査の結果

#### 1. 層序

調査区は、南側から北側及び西側に向かってなだらかに傾斜する。遺構面は傾斜に沿うが西端では急な傾斜となる。層序は第1層・深耕作土、第2層・黒褐色土、第3層・黒色土、第4層・暗褐色土、第5層・黄色火山灰土となっており、第2~4層が遺物包含層である。東側では第1層は浅く約20cm、第3層はほとんどみられず、全体で約40cmである。一方西側では第1層は約40cm、黒色土の第3層がみられ、全体では70cm以上と厚く堆積する。縄文時代の遺物は主に第4層からの検出である。

80cm	✓✓✓	畠耕作土
1		
45cm	2	黒褐色土
30cm	3	黒色土
10cm	4	暗褐色土
5		黄色火山灰土

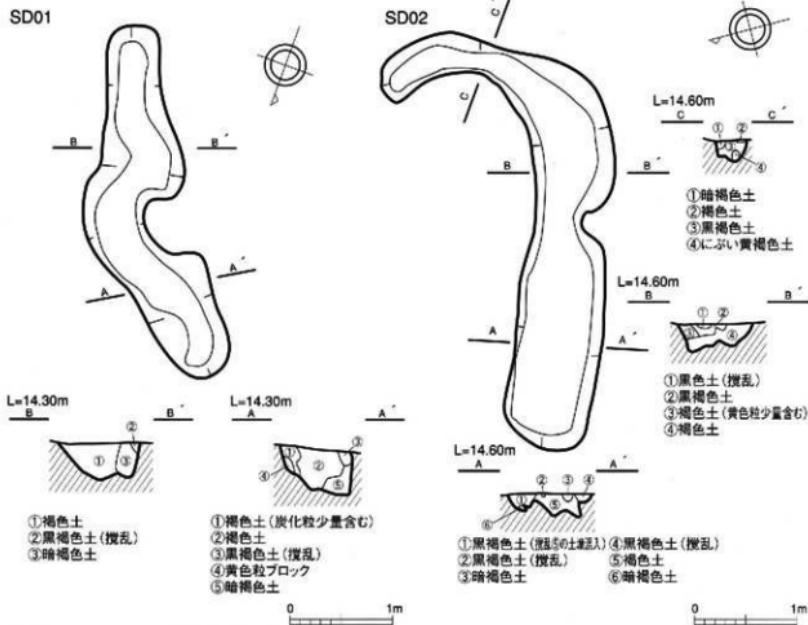
第6図 基本土層図(西側)

#### 2. 遺構

確認された遺構は溝と土坑を含めた35基である。この内で遺物を検出した遺構は22基である。これらの遺構はF~G-3~4、D~E-4~5、D~E-6~7区を中心とした部分に集中している。

SD01 D~E-6~8で検出した溝。幅60~80cm、深さは30~45cm、底部はロウト状を呈する部分がある。溝の中央部は北端や南端と比べてやや浅くなる。覆土は褐色土、炭化粒混じり褐色土、暗褐色土で縄文土器が細片を含めて2点出土している。うち1点は縄文前期。

SD02 D~F-4~5で検出した溝。幅40~80cm、深さは20~30cm、半ドーナツ状に湾曲する。溝の東側部分は西側部分と比較してやや浅く、中央部は幅が狭く締めた形である。このため、2つの土坑が連結している可能性がある。覆土は褐色土、暗褐色土、黒褐色土、黄色地山上混じり褐色土、にぶい黄褐色土である。遺物は石冠(縄文晩期)を転用した四石と帶火跡が各1点出土している。



第7図 SD01、SD02実測図・土層図

**SK01** F~E-2~3で検出した土坑。長軸約3.3m、短軸0.9~1.0mの楕円形で深さは約35cm。覆土は炭化粒混じり黒褐色土、暗褐色土で縄文土器の細片が1点出土している。

**SK04** D~E-6~7で検出した土坑。長軸約1.3m、短軸約70cmの楕円形で深さは約40cmのロウト状を呈する。覆土は暗褐色土、炭化粒混じり褐色土、黄色地山土ブロック状混じり暗褐色土で縄文土器が1点出土している。

**SK05** C~D-6~7で検出した土坑。長軸約2.0m、短軸30~80cmの半ドーナツ型で深さは約30cm。当初、南側部分と北側部分は別々の土坑と認識していたが、土層断面から1つの土坑と判断する。覆土は暗褐色土、極暗褐色土で縄文土器が2点出土している。

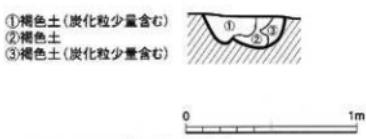
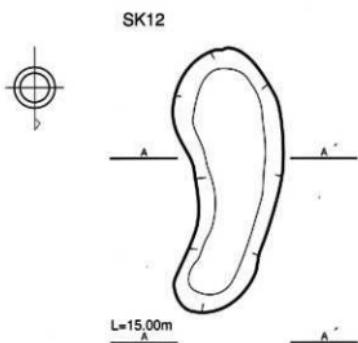
**SK06** D~E-6~7で検出した土坑。長軸約2.0m、短軸1.1~1.2mの楕円形で深さは約40cm。覆土は暗褐色土、黒褐色土で縄文土器の細片が2点出土している。

**SK07** E~F-3~4で検出した土坑。長軸約1.8m、短軸0.5~1.0mの楕円形を曲げた形に近く、深さは約20cm。覆土は暗褐色土、極暗褐色土で縄文土器が細片を含めて6点出土している。うち1点は縄文前期。

**SK12** F~G-3~4で検出した土坑。長軸約1.6m、短軸40~60cmの楕円形を曲げた形に近く、深さは約20cm。覆土は炭化粒混じり褐色土、粗粒の褐色土で縄文土器が6点出土している。その多くは南端の周より約10cm掘り下げたところからの出土である。うち2点は縄文後期。

**SK13** F~G-3~4で検出した土坑。長軸約2.6m、短軸0.5~1.4mの琵琶のような形で、深さは約30cm。覆土は暗褐色土、炭化粒混じり黒褐色土、褐色土で縄文土器の細片が2点出土している。

**SK14** D~E-4~5で検出した土坑。長軸約3.0m、短軸0.8~1.0mの楕円形に近い形で、深さは約35cm。覆土は暗褐色土、褐色土、黒褐色土、にぶい黄褐色土、黄色地山土塊状混じり黒褐色土で縄文土器の細片が1点出土している。



第8図 SK06、SK12実測図・土層図

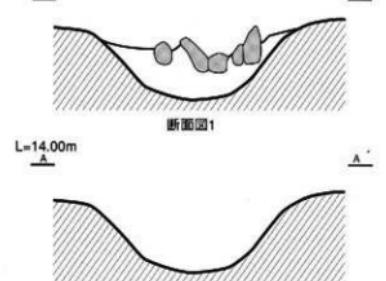
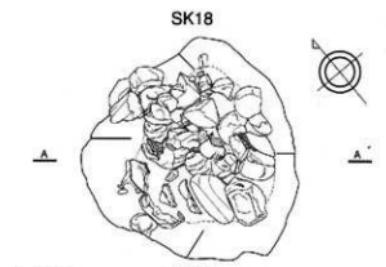
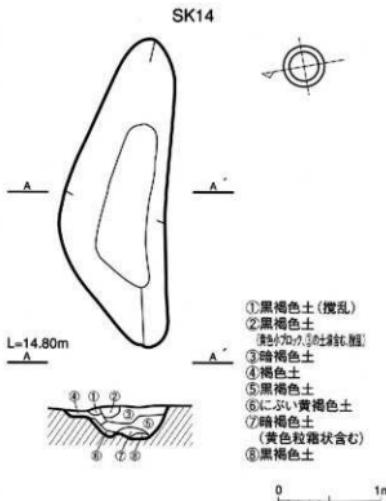
**SK15** D~E-4~5で検出した土坑。長軸約2.2m、短軸約80cmの楕円形で、深さは約35cm。覆土は暗褐色土、褐色土、黒褐色土、にぶい黄褐色土、黄色地山土霜状混じり黒褐色土で縄文土器が細片を含めて14点出土している。ほとんどは縄文前期。

**SK17** D~E-3~4で検出した土坑。直径約80cmの円形で、深さは約20cmのすり鉢状を呈する。覆土は黒褐色土、暗褐色土で縄文土器が2点出土している。

**SK18** D~E-5~6で検出した土坑。直径約80cmの円形で、深さは約35cmのすり鉢状を呈する。覆土は炭化粒混じり黒褐色土、同混じり暗褐色土である。上層は炭化粒を少量含んだ状態だが、下層になるにつれて炭化粒は大きく、多量になり、最下層では殆どが炭化物のため黒色となる。土坑内の東側には焼土が認められる。壁面の焼け方は強く、土坑内で火が使用されたと考えられる。また、土坑には大量の礫が含まれている。礫の大きさは、最大の長軸約26cmから細片に至るまで様々である。礫の種類は、主に流紋岩（濃飛流紋岩）が占め、他に片麻岩（飛騨片麻岩）、ピン岩、安山岩である。いずれの礫も打撃痕、加工痕は認められない上に、鋭角な割れ方や接合可能なものも認められることから火による割れと推測できる。よって、この土坑は炉跡と考えることができるだろう。遺物は縄文土器が1点出土している。しかしながら上層での検出のため土坑の時期は特定しにくい。

**SK19** D~E-4~5で検出した土坑。長軸約1.5m、短軸約70cmの楕円形で、深さは約12cm。覆土は黄色地山上霜状混じり暗褐色土の単層で縄文土器が細片を含めて4点出土している。

**SK20** F~G-3~4で検出した土坑。長軸約3.4m、短軸0.9~1.1mの楕円形で、深さは約50cm。配置的にSK01と平行、またSK01と比べやや深いがほぼ同規模のため両連構には何らかの繋がりが窺われる。覆土は黒褐色土、暗褐色土、黄色地山土霜状混じり暗褐色土、黄色地山土ブロック状混じり黒褐色土で縄文土器が細片を含めて6点出土している。うち1点は縄文後期。



第9図 SK14, SK18実測図・土層図

SK25 E~G-7~8で検出した土坑。長軸約80cm、短軸約40cmの楕円形で、深さは約15cm。覆土は黒褐色土、暗褐色土、黄色地山土霜状混じり黒褐色土で縄文土器が細片を含めて5点出土している。うち1点は縄文前期。

SK27 E~F-7~8で検出した土坑。直径約45cmの円形で、深さは約12cmのすり鉢状を呈する。覆土は黒褐色土、黄色地山土霜状混じり褐色土で縄文土器は出土せず、礫が1点出土している。

SK30 D~E-6~8で検出した土坑。直径約1.1mの円形で、深さは約25cmの円筒状を呈する。覆土は黄色地山土ブロック状混じりにぶい黄褐色土の半層で縄文土器が細片を含めて25点と最も多く出土した遺構である。そのほとんどは縄文前期の同一個体とみられる。

SK31 B~C-4~5で検出した土坑。長軸約1.8m、短軸約1.0mの楕円形で、深さは約30cm。覆土は黒褐色土、にぶい黄褐色土、暗褐色土で縄文土器の細片が1点出土している。

SK32 F~G-3~5で検出した土坑。直径約40cmの円形で、深さは約20cmのすり鉢状を呈する。覆土は暗褐色土、褐色土、炭化粒混じり褐色土、黄色地山土霜状混じり明褐色土で縄文土器が細片を含めて3点出土している。

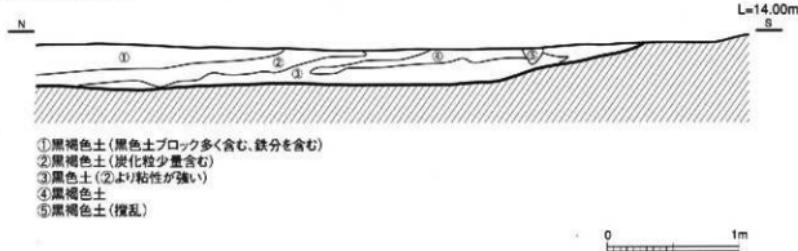
SK33 G~H-3~4で検出した土坑。直径約70cm、短軸約40cmの楕円形で、深さは約20cm。覆土は褐色土、炭化粒混じり暗褐色土、同混じり褐色土で縄文土器の細片が4点出土している。

#### 谷部について

調査地の北側は、南側と高低差があり谷部となっている。谷部における耕作土の堆積は南側と比べて厚いため盛土が行われていたと考えられる。盛土部分から遺物の検出はほとんど無い。表土から約60cm掘り下げた地点からは、縄文土器の検出が若干みられる。調査地周辺の地形から谷部は東から北西方向に伸びていることがわかる。そこで谷部の広がりを確認するため、3本のトレンチを設定し、黄色地山土が表出するレベルまでの掘削を行った。その結果、トレンチ掘りを開始したレベルから更に最高で約60cm掘り下げた。各トレンチの土層の比較から、黄色地山土の落ち込み角度は北西から東の方向に向かうほど急になり、第1トレンチが最も緩やかな傾斜を示している。

トレンチ出土の遺物は第2トレンチからの石錐1点のみで、黄色地山土よりかなり上からの検出であった。このため、谷部への遺物廃棄という状況は確認できなかった。埋土の状況から自然堆積によって埋まったものと思われる。調査区内における谷部は谷の南岸のために、調査区よりやや北側の地点に谷の北岸が存在するであろう。

第1トレンチ(谷部)



第10図 第1トレンチ土層図

### 3. 遺物

今回の調査では、遺構出土の遺物も若干みられるが、ほとんどは包含層からの出土である。全体的に細片で残存状態は良くなく、全器形を復元できたものは無い。

#### (1) 繩文土器

##### ① 包含層出土

前期 1～4は羽状縄文により施文する一群である。2は深鉢の口縁部で、口縁部端はやや厚い。3は深鉢の胴部で中央部に稜がみられる。5は無文で、胎土に纖維が多く含む。6は深鉢の胴部で無文地に沈線の他、半截竹管による横引きの後で筒状工具による連続刺突文を施文する。7と8は同系統深鉢の胴部で、無文地に半截竹管による押し引きの連続によって施文される。9は縄文地に押圧縄文を施文する。10はRLの縄文を施文する。胎土はかなり粗く、表面には多量の煤が付着している。SK30出土の25と同一個体である。11は口縁部で外面に格子体圧痕文を施文する。

中期 12は初頭の新保式で、細い半截竹管文を施文する。13～15は後業の串田新式である。13は串田新I式で、貝殻腹縫による連続刺突文を隆帯状に施文する。14は平縁深鉢の口縁部で、口縁と平行に沈線を施文する。15は串田新I式で、口縁部あるいは胴部に施文した沈線による工状区画の一部である。

後期～晩期 16は深鉢の胴部で貝殻条痕文による器面調整を施される。17は深鉢の口縁部で、三叉文と沈線文を施文する。口縁部端は外側に開き、内面は厚く、断面は三角状である。八日市新保式に比定できる。18は有深鉢の口縁部で、II縁と平行な2条の沈線と縦に3条の沈線を施文する。19は深鉢の胴部で、18と同一個体とみられる。20は深鉢の口縁部で、曲線文様の細い沈線を施文する。八日市新保式に比定できる。21は口縁部にやや幅広の沈線を施文、下部にやや稜がみられる。

##### ② 遺構出土

22はSK20より出土で、4条の沈線を施文する。縄文後期。

23、24はSK12より出土した深鉢の口縁部で、復元口径14.6cm、外反する口縁の外側は無文、内側には2条の沈線を施文する。縄文後期。

25はSK30より出土した深鉢の胴部で、RLの縄文を施文する。表面には多量の煤が付着している。縄文前期。

26はSK25より出土した深鉢の口縁部で、縄文を施文する。外面の摩耗が内側と比べて著しい。縄文前期。

27はSK07より出土で、LRの羽状縄文を施文する。縄文前期。

#### (2) 円盤状土製品

28はRLの縄文を施文する土器片を利用したもので、周開を打欠き、一部は磨いてある。直径は約4cm、包含層出土。縄文前期とみられる。

#### (3) 土器底部（底部圧痕）

29はSK18より出土、胴部の立ち上がりが急であるためにミニチュア土器の底部と考えられる。30は包含層より出土した深鉢の底部で、底面からほぼまっすぐに外側へ開いた部分にはナデによる器面調整が施される。底部には木葉痕とみられる圧痕がある。31は包含層より出土した深鉢の底部である。底部の大きさは胴部へ接続する部位の径とほぼ同じで、外側に開く形態である。網代圧痕文が認められる。

#### (4) 石器

打製石斧 34は平面形態が撥形を呈した完形品で、最大長16.1cm、最大幅6.8cm、重量約416g、石材は砂岩である。側縁部や刃部に多くの調整が施されたとみられるが、刃部は激しく摩耗、剥離の稜線が一部磨滅している。包含層出土。

凹石 35はSD02より出土したもので、最大幅7.5cm、石材はシルト岩である。穴数は1ヶ所のみで、凹みの周囲に敲打痕がある。裏面及び側面には帶火の痕があり、全体にヒビ割れている。この遺物は石冠の転用物とみられる。右冠としては、器高6.8cm、長さ7.5cm、幅3.6cm。頭部はやや丸味を帯びた斧刃状を呈し、両側に向をもつ。底面は平坦な楕円形で、敲打による凹みが1ヶ所ある。全体に研磨整形の擦痕が多く残る。中島分類（中島1983）の第Ⅲ類に含まれる。縄文晚期と推定される。

石錘 36は最大長7.8cm、最大幅7.1cm、重量約242g、石材は花崗岩である。37は最大長9.4cm、最大幅7.4cm、重量約310g、石材は砂岩である。38は最大長5.3cm、最大幅4.2cm、重量約40g、石材は花崗岩である。39は最大長6.5cm、最大幅4.8cm、重量約98g、石材は砂岩である。40は最大長7.2cm、最大幅7.0cm、重量約123g、石材は凝灰岩である。41は残存長5.3cm、最大幅5.6cm、石材は花崗岩である。全て長軸の両端部が打ち欠かれた砾石錘である。全て包含層出土。

敲石 42は楕円形を呈した完形品で、最大長13.0cm、最大幅6.3cm、重量約633g、石材は花崗岩である。長軸方向の両端部に敲打痕が認められる。包含層出土。

磨石 43は楕円形を呈する円盤の片面を磨るものとみられる。最大長9.3cm、最大幅6.6cm、重量約365gを測る完形品で、石材はヒン岩である。包含層出土。

剥片 45は流紋岩による不整形の大型薄片である。5点の同一母岩に属する剥片、石核がある。剥片の剥離は90度の打面転移を行っている。46は粘板岩の石核である。横長の小剥片を数個剥離している。47はハリ質安山岩（下白石）である。全て包含層出土。

削器 48はチャートの継長剥片を分断したものを素材とし、側縁に連続的な小剥離を両側から行って刃部を作り出している。形態は方形状を呈する。包含層出土。

彫刻刀型石器 50はハリ質安山岩の継長剥片を素材とし、基部左側縁に片面調整による基部調整を行っている。また先端部側からは彫刻刀面を1面作り出している。富山県の旧石器時代編年（県教委、1976）による第Ⅲ期bに属すると思われる。

#### 肆

44はSD02より出土したもので、石質は流紋岩、残存長約9.3cm、最大幅9.4cm。長軸方向端部が帶火して炭が付着し、黒化している。写真図版6の49はSK18より出土したもので、石質は流紋岩である。

#### (5) 須恵器

45は須恵器の無台杯身。口径13.2cm。器高3.6cm。口辺部の外側は二次的に火を受けた痕跡がみられ、内面全体には黒い斑点が広がっている。焼成は悪く、灰白色を呈する。奈良時代前期。包含層出土。

46は須恵器の壺で、復元口径23.6cm。口辺部は大きく外反して伸び、3条の沈線を施す。一番下の沈線は他と比較して太めである。また、沈線上にヘラによる刻印がみられる。体部外側には格子状の叩きを施し、内面は同心円の当て具痕を残す。32と同様に焼成は悪く、灰白色を呈する。奈良時代前期。包含層出土。

## IV まとめ

前章まで述べた点と問題点を要約し、まとめとする。

### 1. 今回の調査で確認された遺構は溝2条、土坑33基で、住居跡は検出されなかった。

このうち遺物を検出した遺構は溝2条と土坑20基の合わせて22基である。但し、1つの遺構から検出される遺物数は少なく、細片を含めた数字でも1~2点が多い。その分布状況を見るとF~G-3~4、D~E-4~5、D~E-6~7区に集中している。全遺構の配置をみると、SK01とSK20が平行関係にあるだけでなく、SK01・SK07・SK17・SK03および、SK33・SK20・SK12・SK13・SK32・SD02・SK14・SK15・SK19・SK18は南東~北西方向にはば1本のライン上に位置しているようみえる。

SK30は、最も多くの遺物が検出された遺構である。その数は20個以上と他の遺構と比較して群を抜いている。遺物は主として表面に多量の煤が付着した深鉢の胴部や、縄文時代前期である。

SD02は、石冠を転用した円石が検出された遺構である。この他に帶火の痕がある砾も1点検出されている。縄文晩期の可能性を考えられる。

SK18は、大量の砾の他、焼上・炭化物が検出された遺構である。砾は土坑内に規則的に配置されるのではなく、無造作に埋められた様相を呈している。今回、こうした痕跡が存在するにも関わらず、SK18の周囲に他の遺構は確認されなかった。SK18の北側は調査区から外れているため、新たな遺構が存在することも考えられるであろう。なお、SK18の炭化物については、放射性炭素年代測定(AMS法)を実施した結果、BC4781~4692(確率分配法による年代)の値が得られた。(核燃料サイクル開発機構・東濃地科科学センター)

### 3. 北側の谷部からは、特に遺物を廃棄した痕跡を確認することはできなかった。谷部の南岸は遺構部の近くまで拡がり、北岸は調査区外の北側に位置するといえる。

### 4. 遺物は遺構からの出土も若干みられるが、ほとんどは包含層からの出土である。

旧石器時代の遺物は彫刻刀石器が1点出土している。

縄文土器は後期から晩期のものに加えて、前期のものが比較的多い傾向である。

縄文中期は初頭の新保式、後葉の中田新式が数点みられる。

奈良時代は須恵器の杯と甕の数点で、近隣の長岡杉林遺跡に類似品をみることができる。

石器は前記の彫刻刀型石器1点を除いて全て縄文時代に属するものである。完形品の打製石斧や石冠転用の円石などの中で石錐の検出が最も多い。

以上の調査結果から北代西山遺跡の性格は次のように考えられる。

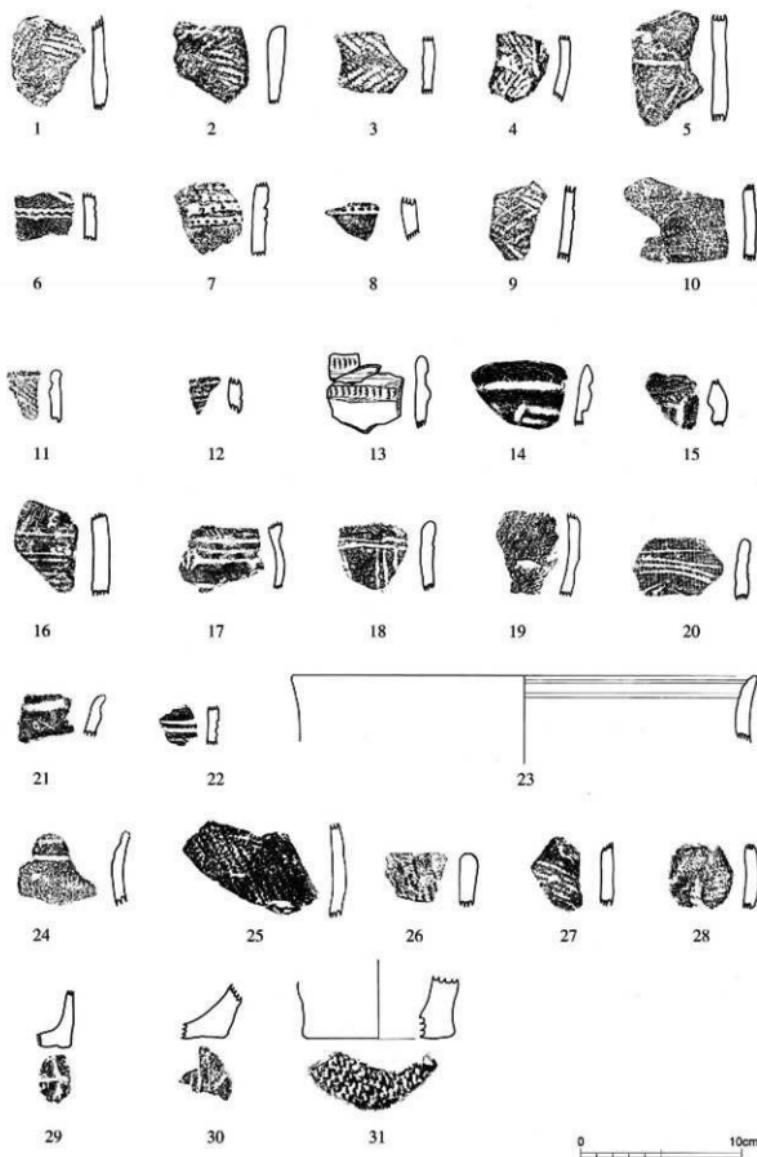
遺跡の存続年代は、主に縄文時代前期前葉から晩期にかけてであり、遺物の出土状況をみると細々とした営みが想像できる。中でも前期前葉と後期から晩期にかけて盛期を迎えるものと考えられる。これは北代地区周辺の遺跡が中期を主体とするに対し興味深い。こうした盛期のいずれについての考察は周辺地域の調査結果を待つことになるであろう。現在、縄文時代前期の遺跡は典羽山丘陵の北麓に集中していることから、今回の調査で前期の集落範囲を南側に拡げられる可能性も指摘できる。

なお、遺構がリング状に配置している点(SK20とSK12、SK13とSK07、SK14とSD02、SK15とSK19、SK08とSK09)、リングの中心部分の地山土が周囲と比べて若干隆起している状況から、今回検出した遺構のほとんどは『風倒木根』とみられる。

最後に北代西山遺跡の性格については、遺物の内容・遺跡の規模や周辺の地形を合わせて考察すると、定住を目的とした場ではなく、狩猟・漁労や採集を行うキャンプサイト的な存在といえよう。

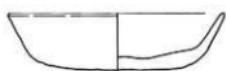
## 参考文献

- 富山県教育委員会 1972 「富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」  
富山県教育委員会 1976 「富山県大沢野町直坂Ⅱ遺跡 発掘調査概要」  
富山市教育委員会 1976 「富山市杉谷遺跡発掘調査報告書」  
富山市教育委員会 1978 「富山市呉羽富田遺跡発掘調査報告書」  
富山市教育委員会 1980 「今市遺跡・北代遺跡」  
富山市教育委員会 1981 「北代遺跡」  
富山市教育委員会 1987 「長岡杉林遺跡」  
富山市教育委員会 1997 「史跡北代遺跡発掘調査概要ーふるさと歴史の広場事業に伴う縄文中期集落の発掘調査ー」  
富山市教育委員会 1998 「史跡北代遺跡発掘調査概要Ⅱーふるさと歴史の広場事業に伴う縄文中期集落の発掘調査ー」  
能都町教育委員会、真脇遺跡発掘調査団 1986 「真脇遺跡」  
野々市町教育委員会 1983 「野々市町御経塚遺跡」  
中島栄一 1983 「石冠・土冠」 「縄文文化の研究9 縄文人の精神文化」 有山編  
橋本 正 1972 「二、縄文早・前期」 「富山県史」 考古編  
藤井昭二 1992 「4.富山平野」 「アーバンクボタ No.31」  
濱 峰 1972 「五、縄文後・晚期」 「富山県史」 考古編

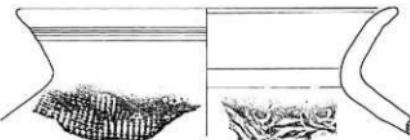


図版1 遺物実測図 (1/3)

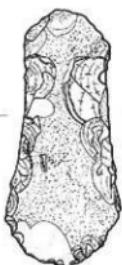
0 10cm



32



33



34



35



37



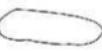
36



39

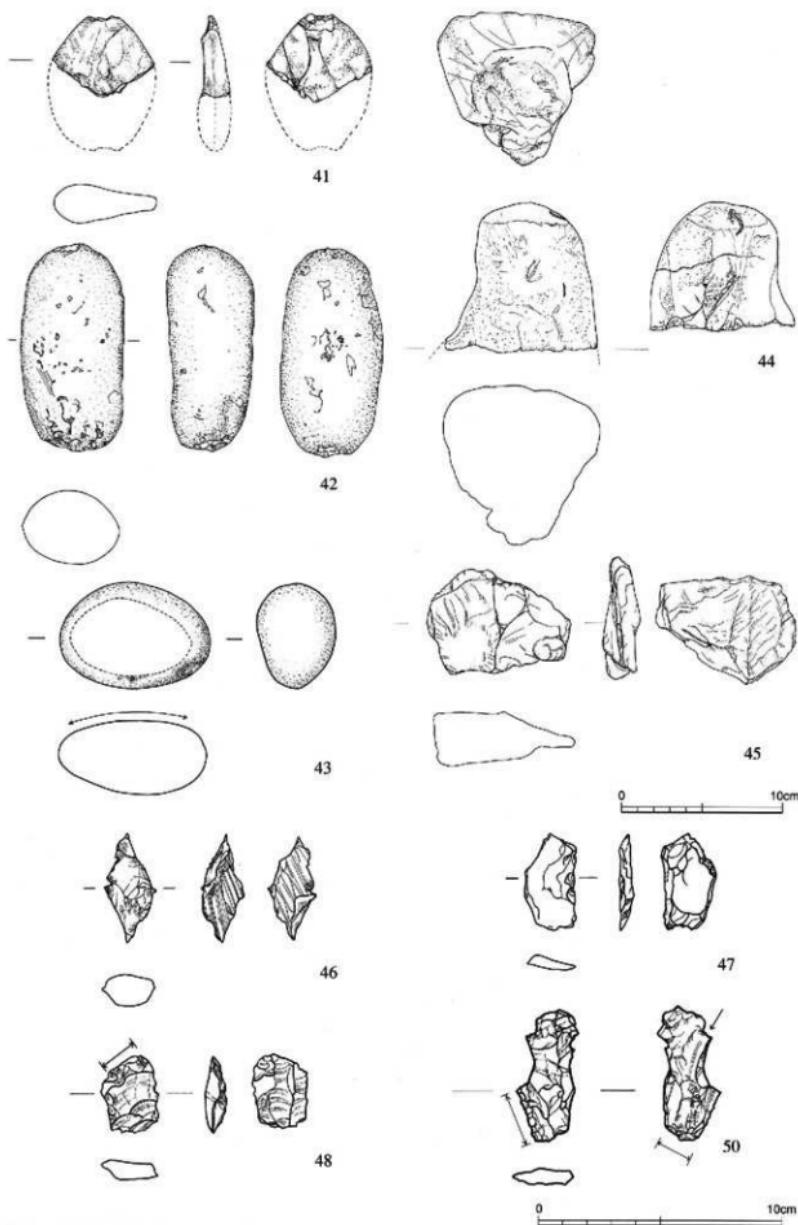


40

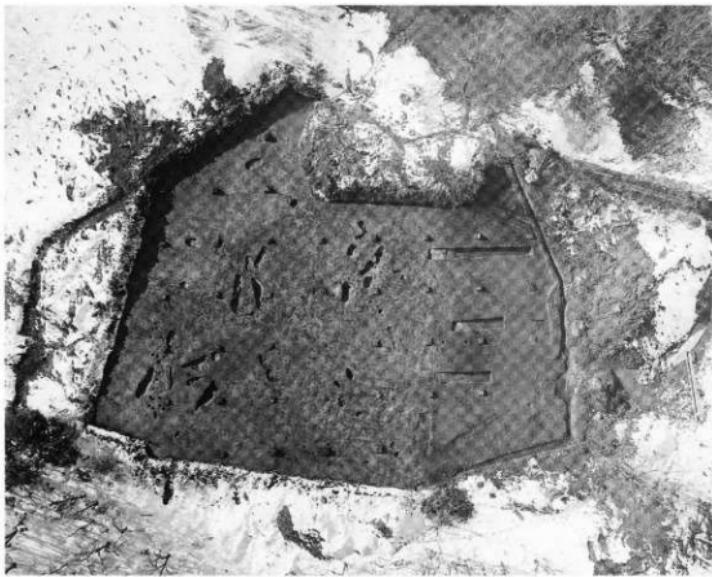


図版2 遺物実測図、石器実測図（1/3）





図版3 石器実測図 (41~45は1/3、46~48・50は1/2)



調査区全体（上空から）



南側 遺構部

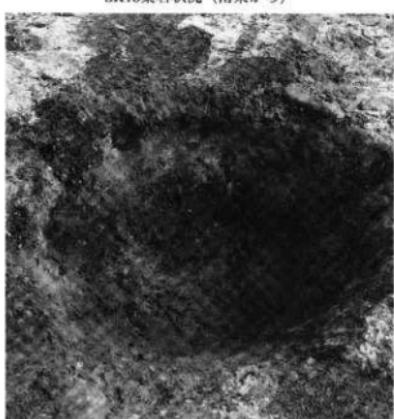
写真図版1



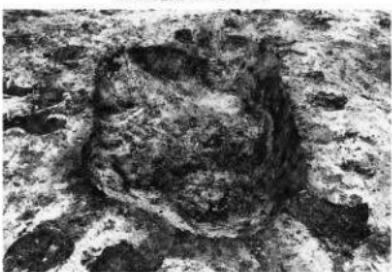
SK18集石状況（南東から）



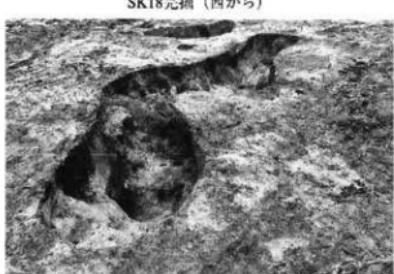
SD02窓掘（南東から）



SK18窓掘（西から）



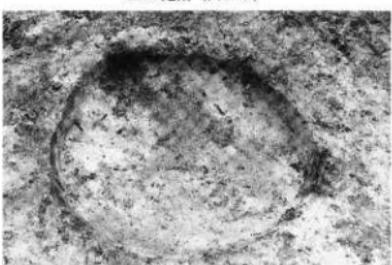
SK06窓掘（北西から）



SD01窓掘（北西から）

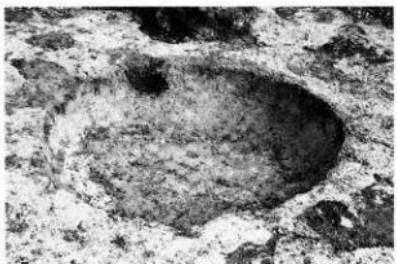


SK14窓掘（西から）

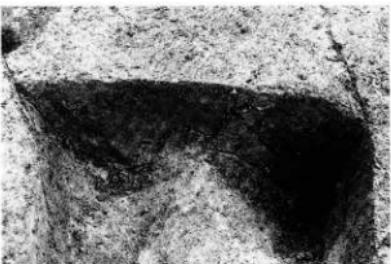


SK17窓掘（北西から）

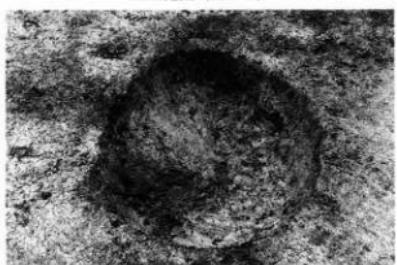
写真図版2



SK30完掘（西から）



SK12断面（北から）



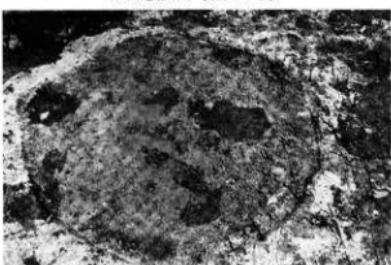
SK33完掘（北西から）



SK20検出面（北西から）



SD01断面（北から）



SK30検出面（西から）

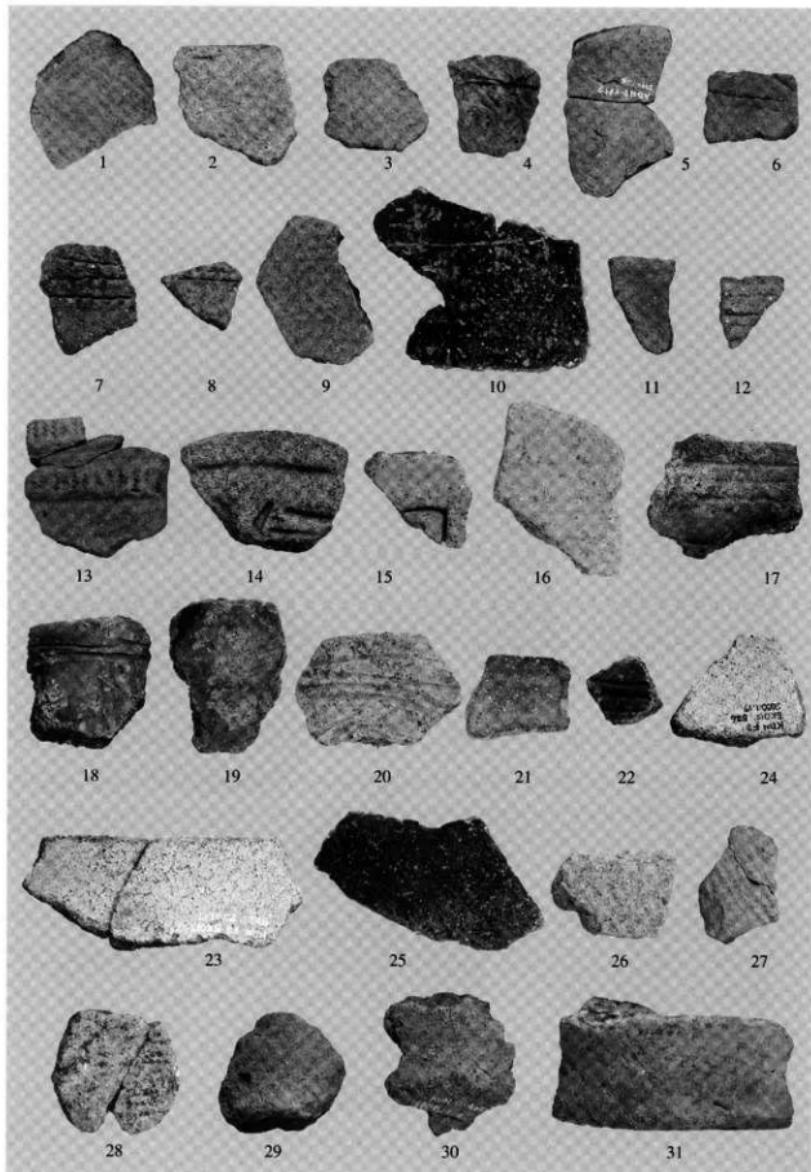


SK06断面（南東から）

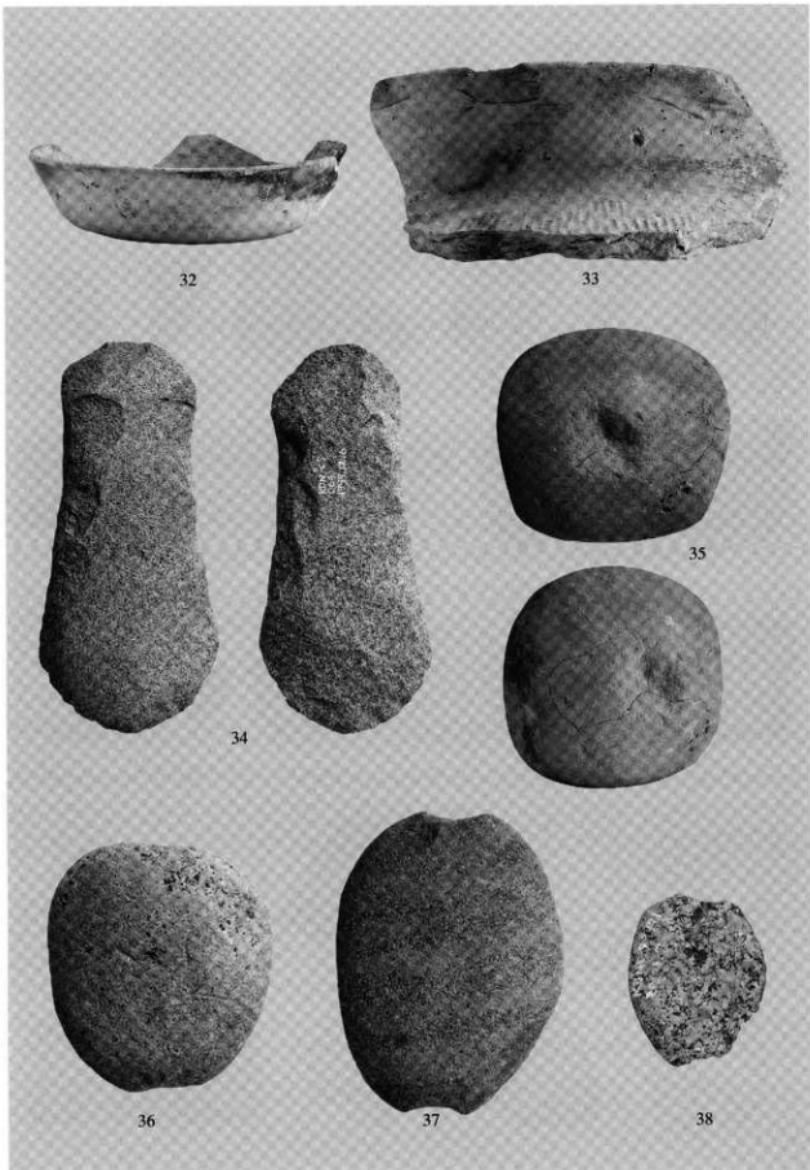


土器出土状況（北西から）

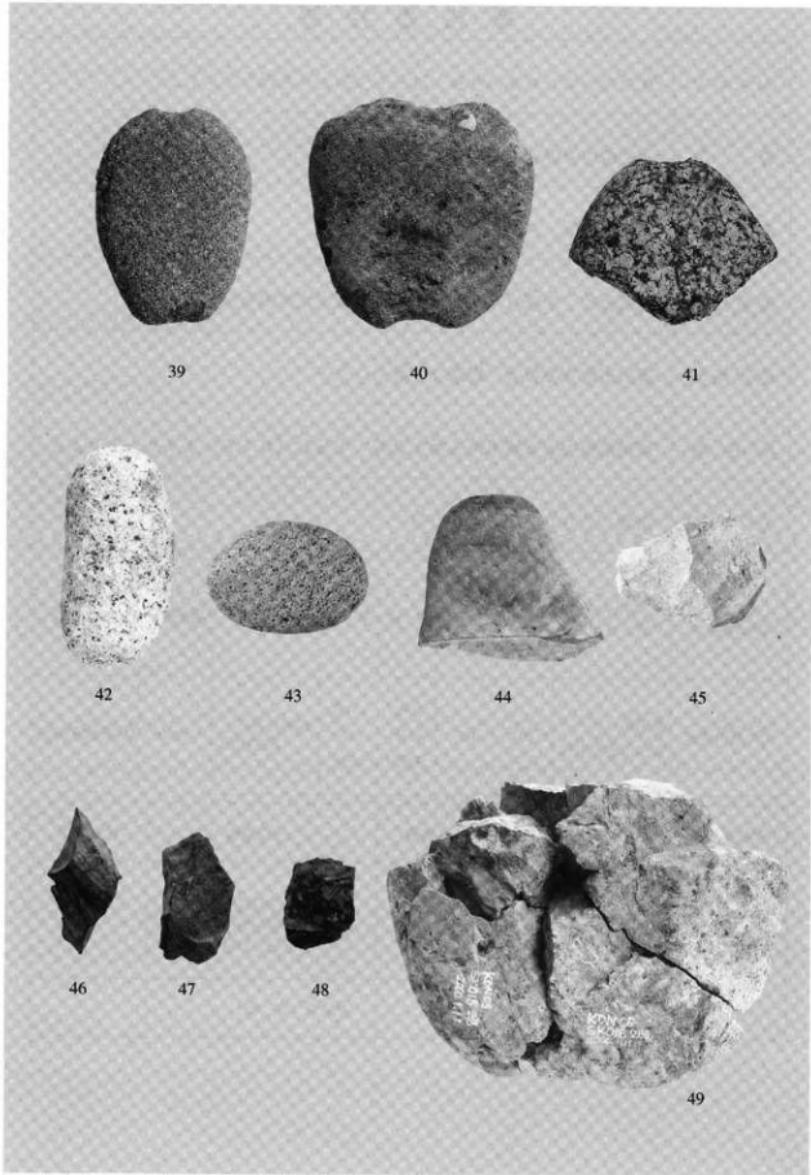
写真図版3



写真図版4 繩文時代の遺物 (1~8, 22~27は約1/2、その他約2/3)



写真図版5 歴史時代の遺物・石器類(32~34は約1/2、35~38は約2/3)



写真図版6 石器類 (39～41、46～49は約2/3、42～45は約1/3)

## 報告書抄録

ふりがな	きただいにしやまいせき はっくつちょうさほうこくしょ					
書名	北代西山遺跡発掘調査報告書					
編著者名	井伊浩一郎・古川知明					
編集機関	株式会社 中部日本鉱業研究所 埋蔵文化財調査室					
発行機関	富山市教育委員会 埋蔵文化財センター					
所在地	富山県富山市下新本町5番12号 TEL(076)442-4246					
発行年月日	西暦 2000年3月10日					
所収遺跡名	ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所住地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>
北代西山遺跡	富山県 富山市北代五区	201	163	36度 42分 30秒	137度 11分 10秒	19991118~ 20000203 1230 幕市緑化植物園建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
北代西山遺跡	集落跡	縄文 (前期、後期~晩期)	土坑・溝	縄文土器、円盤状土製品 石器(打製石斧・石鍬・ 凹石・石冠など)		
		余良		須恵器(杯・甕)		

## 北代西山遺跡発掘調査報告書

2000年(平成12年)3月10日

発行 富山市教育委員会 埋蔵文化財センター

編集 株式会社 中部山本鉱業研究所(高岡市利屋町9番地)  
(富山市下新木町5番12号) TEL 076-442-4246

